

全自動透析装置を使用した在宅血液透析(HHD)の有用性と課題

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎腎クリニック

○石飛征斗 佐藤泰崇 林田征俊 田中 健 矢野利幸 高木伴幸 河津多代 久原拓哉 澤瀬健次
橋口純一郎 原田孝司 舩越 哲

【背景】

現在、清浄化された逆濾過透析液を用いた全自動型透析装置は施設において広く使用されているが、日本透析医学会の定める透析液水質基準を遵守することが必須条件である。一方、HHDに関しては水質のバリデートが困難である点から、逆濾過透析液を用いるシステムはあまり普及していない。

【対象】

当院のHHD 施行患者 18名のうち全自動透析装置を使用している6名。(男2名、女4名、平均年齢63.3歳±10.1歳)

【目的】

HHDに全自動透析装置を使用し、そのメリットとデメリットを検証する。

【結果】

従来の透析装置から全自動型に変更することで、有意差は認められなかったがHHD移行のための平均教育期間は4.3ヶ月から3.8ヶ月に短縮し、作業の単純化によりヒューマンエラーも減少する傾向にあった。一方、透析液水質基準は担保されたが、透析液の再検や洗浄を要し、病院スタッフの訪問回数が増加した。

【考察】

今回、HHDへの全自動透析装置の導入は、患者教育期間の短縮やヒューマンエラーの減少が認められたことより患者側へのメリットは大きく、HHDの普及に一躍買う可能性が示唆された。しかし、水質の安全性維持には多くのマンパワーを要し、最適な洗浄方法や回数など、継続的な検討が必要と思われる。